

食品に関するリスクコミュニケーション（東京）
- 米国における食品媒介疾患と薬剤耐性菌の現状と最新知識 -
概要

1. 開催日時：平成17年5月11日（水）13：30～16：07
2. 開催場所：東京ウィメンズプラザ（東京都渋谷区神宮前）
3. 主催：食品安全委員会、厚生労働省、農林水産省
4. 参加者：145名（食品関連事業者、行政関係者、消費者、報道関係者等）
（米国疾病管理予防センター）フレデリック・アンギュロ博士
（食品安全委員会）寺尾委員長代理、小泉委員、見上委員、本間委員、
各専門調査会専門委員、ほか
5. 議事の概要：
 - （1）冒頭、寺尾委員長代理より開会挨拶。
 - （2）続いてフレデリック・アンギュロ博士より、「米国における食品媒介疾患と薬剤耐性菌の現状と最新知識」と題して講演。
 - （3）休憩の後、会場参加者との意見交換（約60分間）。主な発言は以下のとおり。
（ ）内はアンギュロ博士の応答

抗生物質の使用量と薬剤耐性菌の発生との関係について教えてほしい。

（抗生物質を食用動物に過剰投与することが薬剤耐性菌発生の大きな原因であるという見方が国際的には主流である。抗生物質の使用を減らすためには、関係者の利害を超えて合意を得ることが必要。人間にとって重要な抗生物質は動物に使うことを控える、動物の成長促進など経済的利益のためには抗生物質を使用しない、などの対策をとる必要がある。）

野菜によるサルモネラ食中毒の原因は肥料か。

（野菜の栽培時に使用する水が家畜等により汚染され、野菜も汚染されたと考えることができる。米国においては、農場から出る水が野菜の栽培に使われていることの方が肥料の使用よりも大きな問題となっている。野菜に火を通さずに食中毒を防止するのは非常に難しい。）

米国のリステリア菌の現状とリコールの条件について教えてほしい。

（米国では調理せずによく食べられる食品にリステリア菌が存在した場合は、市場から自動的に回収するよう法律で定められている。1990年代後半にその法律が制定されたことにより、米国でのリステリア感染は大きく減少した。

また、PulseNet（いわゆる全国早期警戒警報システム）によって検出されたり、ステリア集団感染を受けて、食肉産業界においてもリステリア感染を防止するため、包装方法・製造方法の改善などの対策がとられている。）

ビブリオの感染源について、米国では、傷口からの感染が 25%あるということだったが、もう少し詳しく聞きたい。

（ビブリオ感染症の中では腸炎ビブリオが一般的だが、25%は傷口から感染する。既に傷口があって海水浴をした時などにビブリオに感染する場合がある。また、特に汚染されている海域もある。基礎疾患があると、傷口による感染症が重篤になる例が見られる。）

家畜への抗生物質投与について、日本でも合意を得ることが難しい中で試験的に投与を抑える仕組みづくりを行っている。米国でも同様の取り組みを行っているのか。

（FDAにおいては、食用動物に対する薬剤の使用に関して、従来の毒性、使用量（食品における残渣）に加え、新たに耐性に関する安全性を示すことも求めている。いずれ厳しい規制を行ってきた欧州並みの体制になるだろう。）

日米の食中毒による死亡者数の相違は、統計手法の違いのみによるものか。

（疾病数を比較するためには、調査方法を明らかにすることが必要。そのためにも FoodNet（サーベイランスシステムの一つ）のような実数を推計できるようなシステムが必要である。日本の問題は、正確な規模が不明なことである。）

ヨーロッパでは、動物福祉の観点からゆったりとした飼養形態がとられている。日本のプロイラー業者からは、ゆったり飼うと抗生物質の使用を減らすことができるという報告があった。健康的に飼育すれば使用する医薬品は減らせるのではないか。

（人道的な飼育は、必ずしも抗生物質の減少につながるとは限らないと考えている。ヨーロッパでは、成長を目的とする抗生物質を動物に使うことは禁止しているが、抗生物質の使用と飼育密度の関係は明らかではない。）

（４）最後に見上委員より閉会挨拶。

食品に関するリスクコミュニケーション（東京） 米国における食品媒介疾患と薬剤耐性菌の現状と最新知識 アンケート集計結果

開催日：2005年5月11日（水）

参加者数：145名 回答数：101名

回答率：69.7%

問1. あなたご自身のことや食品の安全性に関するお考えについてお聞きします。

性別

回答内容	件数	割合
1. 男性	76	75.2%
2. 女性	25	24.8%
無回答	0	0.0%
	101	100.0%

年齢

回答内容	件数	割合
1. 20歳未満	0	0.0%
2. 20歳代	7	6.9%
3. 30歳代	21	20.8%
4. 40歳代	29	28.7%
5. 50歳代	25	24.8%
6. 60歳代	18	17.8%
7. 70歳以上	1	1.0%
無回答	0	0.0%
	101	100.0%

職業

回答内容	件数	割合
1. 消費者団体	7	6.9%
2. 主婦、学生、無職	8	7.9%
3. 生産者	2	2.0%
4. 食品関連事業者	30	29.7%
5. マスコミ	3	3.0%
6. 行政	23	22.8%
7. 食品関連研究・教育機関	9	8.9%
8. その他 製薬会社(4) 動物用薬品メーカー(3) 大学教官(1) 技術士(1) 行政OB(1) NPO(1) 法人(1) 業界団体(1) 食品安全委員ウイルス(専門調査会専門委員)(1) 食品廃棄物の飼料化事業(1) 無記入(3)	18	17.8%
無回答	1	1.0%
	101	100.0%

本日の意見交換会に参加された動機

回答内容	件数	割合
1. 米国における食品媒介疾患や薬剤耐性菌に関する情報に興味があったから	69	68.3%
2. 日本における食品媒介疾患や薬剤耐性菌に関する情報に興味があったから	14	13.9%
3. 講演者に、直接、質問や意見を言いたかったから	0	0.0%
4. 日本の行政や専門家に直接意見を言いたかったから	0	0.0%
5. 業務の一環として参加する必要があったから	14	13.9%
6. その他 業界の委員会の一員として。(1) 食品安全委員会ウイルス専門調査会専門委員(1)	2	2.0%
無回答	2	2.0%
	101	100.0%

食品安全に関する意見交換会への参加回数（今回を含めて）

回答内容	件数	割合
1. 初めて	48	47.5%
2. 2回目	21	20.8%
3. 3回目	13	12.9%
4. 4回目	1	1.0%
5. 5回以上	16	15.8%
無回答	2	2.0%
	101	100.0%

「100%安全な食品はないこと」について、あなたはどのように思われますか。

回答内容	件数	割合
1. 強くそう思う	69	68.3%
2. ややそう思う	25	24.8%
3. あまりそう思わない	2	2.0%
4. 全くそう思わない	3	3.0%
5. わからない	0	0.0%
無回答	2	2.0%
	101	100.0%

問2. 本日の意見交換会の実施方法についてお聞きします。

開催方法（参加手続き・場所・所要時間）

回答内容	件数	割合
1. とてもよかった	25	24.8%
2. よかった	72	71.3%
3. あまりよくなかった	2	2.0%
4. 全くよくなかった	0	0.0%
5. わからない	1	1.0%
無回答	1	1.0%
	101	100.0%

専門家による講演

回答内容	件数	割合
1. とてもわかりやすかった	39	38.6%
2. わかりやすかった	60	59.4%
3. わかりにくかった	1	1.0%
4. 全くわからなかった	0	0.0%
無回答	1	1.0%
	101	100.0%

配付資料

回答内容	件数	割合
1. とてもわかりやすかった	30	29.7%
2. わかりやすかった	69	68.3%
3. わかりにくかった	2	2.0%
4. 全くわからなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
	101	100.0%

意見交換時における講演者の応答

回答内容	件数	割合
1. とてもわかりやすかった	23	22.8%
2. わかりやすかった	60	59.4%
3. わかりにくかった	9	8.9%
4. 全くわからなかった	0	0.0%
無回答	9	8.9%
	101	100.0%

ご意見・ご感想

1	後日、ホームページで参加者の構成などを公表してほしいです。国内外を含めて、著名な研究者の話を聞くことができるとも良かったと思います。こういった取組は食品安全委員会に対する信頼につながると思うので、今後も続けてほしいです。もう少し意見交換の時間が長いと良いと思います。
2	地方でも開催していただきたい。
3	この内容の日本語版もしてほしい。
4	大変参考になりました。日本国内産業にどう生かすかが今後の課題と考えます。
5	食のグローバル化に伴って、日本も世界と等しく食のリスクを共有する状況になって来ているが、日本スタンダードからグローバルスタンダードで物事を見る必要がある。この意味で、このような海外事情を拝聴する機会は是非とも増やして欲しい。
6	質問させていただきました。博士に答えていただき嬉しかったのですが、日本としてこの講演を開催してどのように役立てるのか、教えていただければ、と思います。また、食中毒の同定が盛んになると食品業界としてはリコールや信用失落になり、大変だと思うのですが、「食の安全」に真摯に取り組むこともできると思っています。
7	平易なことば、表現に配慮が感じられた。より工夫、徹底を望みます。 講演者の話が“絶対”ではないという事も（当然ですが）心に留めておかなばならない点も指摘していただきたい。
8	最新情報を確認できて、有用であった。
9	より多くの人に知ってもらうため、TV、新聞等で企画をアピールすると良いと思います。又、今日、日本の現況を語れる人の参加があると良かったと思います。

10	医師から食中毒菌が検出しても食中毒と保健所へ届出ないケースがある。1名のサルモネラ患者とか、カンピロバクター検出等。届出があっても、その感染経過をつかむことがほとんどできないのが現状です。食中毒患者数の把握は実数がわからないのが今の日本の状況です。耐性菌の問題は益々課題になると思われます。
11	薬剤耐性が、一般の人の中でどのくらい問題になってるのが関心が高いが、いまひとつわからない。重要なことと思うが、一般消費者としては、そう関心が高くないのかもと思っています。この辺の情報が実はほしかった。
12	抗生物質の乱用によって食中毒の原因となるとのアピールをこれからもっともっとして下さい。今まで人間が抗生物質を飲みすぎたというようにしか理解していませんでした。私たちが食べている食肉にこんなに使われているか不勉強でした。今後もっとこういう機会を多くしていきたいと思います。ありがとうございました。
13	休憩時間がやや長すぎる。30 15分程度？
14	1. 休憩時間とりすぎ、中だるみになった。2. それにしても開閉のあいさつのしゃべりが下手。アンギュロ博士のプレゼン、attitudeを勉強すべき。
15	仕方ないことですが、通訳の方の話が大変早く、理解するのに大変であった。
16	リスクコミュニケーションを通して海外状況を一般の人に紹介することはとても良いことだと思います。今回に関しては、日本政府側の説明もあれば良かったと思いました。
17	問1 で一度、わからないや、そう思わないを一番にもってきて、アンケートを作ってみてほしい。何故、今月このテーマのリスクコミュニケーションを行うのだろうと思った。
18	この様な会合には、出来るだけ参加したい。予算的なこともあるが、又計画していただきたい。
19	一消費者として知った上で、選択することができるような情報発信、公開を進めてほしい。知らされないでリスクを消費者にとらせることがないように望む！
20	特にありません。
21	食に関わるリスクで薬剤耐性菌の問題は最重要課題と考えています。BSE、農薬、GMOといった課題とともに継続的に意見交換会を開催され、積極的なコミュニケーションをして頂きたいと思います。
22	原稿棒読みでない方が良いです。
23	食にまつわる神話が多すぎる。それに乘じたようなJAS有機の表示等科学的根拠のないものは改めるべき。
24	耐性菌については、難しい問題などがあると思いますが、食用とするにわとり等の動物への投与以外に、環境中にまかれたりした抗生物質についての話題があればいいと思います。
25	知識が未熟で講演内容に分からない所もありましたが、用語集などの資料を色々頂いたので、勉強したいと思います。
26	食品安全委員会と国民（消費者、生産者）の距離が近くなり、好ましい状況。・問題は行政の縄張り意識。・今回の質疑の中で厚労省研究所からのコメントはわかりやすく、的確であった。
27	貴重なお話を聞く機会に参加できて喜ばしく思います。大変わかりやすいと思いました。配付資料の“食品の安全性に関する用語集”を助けとして聞いたため（解説の理解が早く）よくわかりました。
28	ご講演ももちろんですが、質問者の皆様のご質問、ご意見が大変建設的だったことが印象的でした。
29	耐性菌問題につきましては、もう少し多角的な意見について交換できるよう、それぞれの立場の専門家の知恵もそろえた型での形式にした方が良いと思われました。
30	米国の事情を紹介することも重要で、たいへん参考になったが、食品安全委員会としてのご提案もあれば、リスクコミュニケーションの目的がさらに達せられたのではないのでしょうか。
31	休憩が少々長いと思います。
32	日本における対応もわかるとよい。
33	食中毒に関するプレゼンが主であったが、参加者の関心は家畜への抗生物質投与ではなかったか。講演テーマは家畜用薬剤で絞って次回開いて欲しい。
34	せっかく足を運んだので、もう少し会にボリュームがあるとよかったです。
35	Netの必要性感じた。